

和牛の需要回復遅く

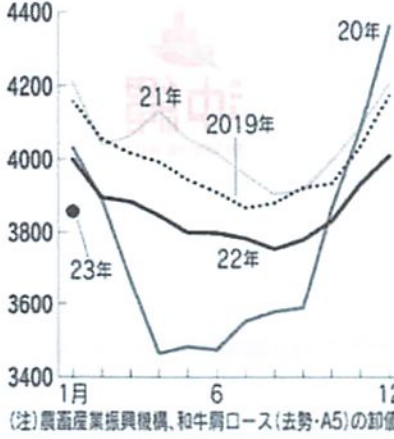
肩ロース卸値4%安 外食伸びず低迷

新型コロナウイルス禍からの経済回復で食料需要が持ち直す陰で、ブランド食材の「和牛」の相場が低迷している。サーロインや肩ロースの卸値は前年同期比2〜4%安い。外食が復調する中でもディナー会食や宴会など、和牛を使う食事が広がっていない。食品全般の値上げに伴う消費者の節約志向で高価格の食材が敬遠されるおそれもあり、需要の本格回復はまだ先との見方が多い。

会食は少人数、節約志向も影

農畜産業振興機構(東京・港)によると、食肉卸業界から外食・小売業に販売される23年1月の和牛の卸値は、すき焼きやしゃぶしゃぶに使う肩ロース(去勢、A5ランク、税別)が1キログラム858円と前年同月比4%安。コロナ禍前の19年1月との比較では7%小売市場の混乱も徐々に

和牛相場はコロナ禍前を下回る
円/キログラム



落ち着き、相場は持ち直し始めた。ところが、22年は行動制限の緩和という追い風にもかかわらず相場はむしろ再び軟化し、各月は21年よりも低い水準で推移した。23年に入っても反転上昇の兆しはまだ見えない。背景はいくつかある。まずは外食向けの需要回復の停滞だ。日本フードサービス協会によると1月のディナーレストランの売上額は19年1月に比べ15%少ない。都内の大手食肉卸の販売担当者は「コロナ禍前は10人規模だった会食が4人程度にとどまり、(多めの人数で開く)焼き肉や鍋などに向けた消費が伸びない」と

とぼやく。家庭の需要を示すスーパーなど量販店向けも鈍い。都内の食肉卸では22年4月〜23年2月の和牛の小売店向け販売量が前年同期比で1割減少した。様々な食品の値上げ

が相次ぐ中で消費者の生活防衛意識が、高価格の和牛の消費を鈍らせているようだという。「量販店から和牛の注文が減り、和牛よりも価格の安い交雑牛や豚肉の注文が増えた」(食肉卸の役員)。22年は輸出が低調だったことも国内相場の下押しにつながった。近年は和牛をはじめ牛肉の輸出が伸びてきたが、22年の輸出額が抑えられたことが相場の下支えにもなった。22年になると、補助金が終わるのを見越した食肉卸などの流通事業者は22年度、回転すしチェーン向けに和牛の販売を本格的に始めた。握りすし肉用のロースといった定番部位のほかの需要の掘り起こしだ。JA全農

な輸出先である米国で低関税の輸入枠が他国産の牛肉で22年早々に埋まると、日本から米国へ輸出を伸ばせなかったことが響いた。政府の需給対策がなくなる影響も大きい。政府は20〜22年度、和牛の冷凍品の保管倉庫代などを補助する施策を実施した。市中への冷凍品の供給が抑えられたことが相場の下支えにもなった。22年になると、補助金が終わるのを見越した食肉卸が冷凍品の一部を市場に出し、需給緩和の要因になった。市場では、相場反転には需要回復のペースが上がる必要があるとの見方が多い。政府は新型コロナウイルスの感染症法上の分類を5月8日に、季節性インフルエンザと同じ「5類」に移行する。食肉卸の担当者は「飲食を伴う法人の大規模な宴会などの動きが戻るきっかけになれば」と需要回復の底上げに期待する。

食肉卸、消費喚起急ぐ

食肉卸などの流通事業者は22年度、回転すしチェーン向けに和牛の販売を本格的に始めた。握りすし肉用のロースといった定番部位のほかの需要の掘り起こしだ。JA全農

きた焼き肉チェーンに、和牛の売り込みを強化した。サーロインに比べ3〜4割ほど割安なモモやウデなど多様な部位を提案している。全国チェーンの23年度からのメニューに決まったという。産地のこだわりなどで消費者に訴求する動きもある。ニイテック(東京・江東)が力を入れるのは沖縄県の黒毛和種の石垣牛だ。配合飼料などの飼育の工夫により、脂身がさっぱりする肉質や食味のばらつきを少なさをPR。石垣牛の22年4月〜23年2月の販売額を前年同期比4割増やした。高級スーパーのクイーンズ伊勢丹などでの販売を伸ばしている。

「割安なモモ・ウデ使って」 定番部位以外も販売強化



23年度はバラ肉なども売り込む。脂身の多いバラ肉をサイコロ状にカットし赤身とのバランスがよい味わいを強調する。販売量は22年度比で5割増を計画する。スターゼンはこの輸入牛肉などを納入して